

見えなくされた人々 ―パレスチナの人々―

主教 植田仁太郎

東京教区の訪問団の一員として、再びパレスチナの地を訪ねることができました。昨年来日して下った、リア主教とそこ一行の何人かの方々と、各地の教会で再会することもできました。この機会を作ってくださった、エルサレム教区・東京教区それぞれの皆さまに、まず感謝申し上げます。

これらの交わりの機会をとおして、パレスチナの人々が、歴史的に、そして世界の中で、どのような位置におとしめられてきたのか、段々わかってきました。ひと言で言ってしまうと「見えなくされてきた人々」ということでしょう。これまで、ほぼ二千年にわたって、そして特に過去百年間ぐらいは、パレスチナの人々は、ずっとあの地に、何千年にわたって存在しているのに、世界の中でずっと「見えなくされて」しまいました。

何によって「見えなくされた」のでしょうか。二つの大きな影によって「見えなくされて」います。

第一の影は、そこがキリスト教の発祥の地、「聖地」であるという影によって見えなくされてしまいました。あの地は、エルサレム始め、ベツレヘム、ナザレ、ガリラヤ、カペナウム等々の町や村や地方は、必ず、聖書とイエス・キリストとの関係の中で、憶えられ、語られてしまいます。それ以外の仕方では憶えられ、語られることはほとんどありません。

今、人口がどのくらいで産業は何で、学校がいくつあって——なんて聖書と関係ないことに興味を持つ人はいません。誰が住んでいるのか、どういう民族が、どういう文化を持って暮らしているか——などということには、何世紀にもわたって世界は関心を持ちませんでした。ヨーロッパの国と教会は、そこに住む人々やその暮らしにではなく、イエスが説教された所、マリアに天使が現れた所、イエスが奇跡を行われた所に関心を持ちました。そこに現に住んでいる人達に、特に関心を持ちませんでした。これが「聖地」という影によって、パレスチナの人々は「見えなくされ」てしまったという意味です。

もう一つの第二の影は、イスラエル建国にまつわる様々な美談です。イスラエル建国に至る世界的物語が伝えられる中で、あの地は、まるで誰も住んでいなかったかのように、パレスチナの人々は「見えなくされて」しまいました。その美談の前史は、ヨーロッパにおける長年のユダヤ人迫害であり、ユダヤ人差別です。それは、第二次世界大戦中のナチスによるホロコーストで頂点に達し、ユダヤ人迫害に対するざんげの世論形成に決定的な契機となりました。「ユダヤ人が国家を持てるようにしてやらなければならない」という声が、ヨーロッパ・アメリカで大きな流れになりました。そしてユダヤ人のパレスチナへの移住の苦労、キブツなどの共同体によるパレスチナ開拓の苦労が建国の輝かしい歴史として語られ、1948年国連における劇的な決議によって「イスラエル建国」が成し遂げられました。

その全過程の中で、ユダヤ人により武力で侵略され、占領されていったパレスチナの人々への関心と同情はほとんどありませんでした。パレスチナの人々は完全に「見えなくされて」しまいました。二千年間亡国の民であったユダヤ人、迫害・差別されたユダヤ人に国を与えることが正義であり、その影でそのことには何の責任もないパレスチナの人々は、まさに無視されてきました。

400万人といわれるパレスチナ難民の人々が、どのようにして、ユダヤ人によって、あるいはイスラエル国家によって故郷を追い出されていったか——それはとても、イスラエル建国の輝かしい歴史ではありません。それは、武力と軍隊による横暴で、現在もそれが続いています。

パレスチナの人々、とくにパレスチナのクリスチャンとの交わりは、まず、この二つの影を取り除いてパレスチナの人々の在りのままの姿に接することから始まります。それは、あそこは「聖地だ」、あそこは「イスラエルであって当然だ」という、これまでの観念から離れて、その人々を理解することから始まる

と思います。

そして、そのことは、私たちの信仰の在り方にとって、とても重い問いを問いかけてきます。ひとつはユダヤ人の歴史の書であり、救いの歴史の書であるとされる旧約聖書を、どのように読むか、ということ我问うことです。そしてもうひとつの重い問いは、「聖地」を尊ぶあまり、その地に住む人々への関心を失わせることになってしまった信仰心は、どこに、その弱さや誤りがあったのだろうかということです。パレスチナ人クリスチャンであるエルサレム教区の方々との交わりが、今後も、私たちの信仰の在り方を問うきっかけを作ってくれるものと期待しています。



送別夕食会にて（エルサレム教区リア・アブ・エル＝アサール主教と
東京教区植田仁太郎主教）

「エルサレム教区の女性たちと出会う訪問」を終えて

＜はじめに＞

私たち、日本聖公会東京教区の2005年中東聖公会エルサレム教区訪問団は、2005年7月21日～28日の8日間にわたってパレスチナ各地をまわり、ラマラ（ヨルダン川西岸地区）、ガリラヤ地区（イスラエル国内）、レイネ（イスラエル国内）、シェファールーム（イスラエル国内）、ハイファ（イスラエル国内）の諸教会の女性達と語り合う機会を与えられました。最初に、このプログラムを用意し各地で迎え入れて下さった、すべての関係者に深く感謝いたします。

実際に女性達と過ごし、また討論する時間を重ねて、パレスチナの女性としてまたアラブ人クリスチャンとしての悩み、思い、願いを分かち合い、私たちの認識を深めることができたのは、たいへんありがたいことでした。

またこの機会に、「聖地」と呼ばれるこの地の、聖書とイエス・キリストにまつわる数多くの遺跡とそこに建てられた教会、そして聖書が語る時代と変わらぬ自然に触れ、私たちの信仰と知識の養いとすることができたことも、大きな喜びです。

さらに、この地の困難な政治状況の中で、その状況をすこしでも平和の方向へ変えていこうと努力している方々から、専門的な分析と解説をうかがい、その献身的な活動に感銘を受けました。

以下に、私たちが、この訪問を通じて共通に見いだし、また認識したことを項目としてまとめてみました。これらの点を私たちの訪問のまとめとして東京教区内外の方々に伝え、パレスチナの兄弟姉妹が置かれた状況について理解を深め、今後の連帯と協力の助けとしたいと思います。また、パレスチナの地のすべての人々の平和と正義と和解の実現のための諸活動、とくにキリストの証しと奉仕の諸活動の一端に関わりつつ、日本におけるキリスト者としての証しと奉仕が深められることを祈り続けたいと思います。

＜パレスチナの女性たちが直面させられている問題＞

- (1) イスラエル国内に生きるパレスチナの女性たちは、イスラエル国籍の市民であるにもかかわらず、ユダヤ人に比べて、子どもたちの教育と仕事の機会がたいへん制約されていることに危機感を抱いています。その中で幼稚園や保育園、学校を充実させ、教育を受けた女性たちがユダヤ人と対等に社会に貢献できるような環境を望んでいます。
- (2) 西岸地区・ガザ地区など、パレスチナ自治区に生きる女性たちは、イスラエルの占領下にあるために著しく生活の自由が奪われています。イスラエル国内の家族や親戚を訪問することも許されず、その安否を確かめることもできないという苦しみを感じています。乳幼児の死亡率が他地域より高く、母体の健康、乳幼児の健康を守る条件が満たされていません。これに対して、母子の栄養補給を支援しているNGOの働きを学びました。
- (3) これら女性たちの痛みの背後には、「見える壁」（分離壁）が今もなお建設され、人びとの生活を分断し、教育や健康、就業への困難をもたらしているという現実があります。この分離壁は、人が乗り越えることのできない高さのコンクリートでできた壁で、イスラエルがパレスチナ自治区やパレスチナの人たちの居住周囲を封鎖している、まさに「隔離の壁（アパルトヘイト・ウォール）」です。イスラエル側はこの分離壁を「安全のためのフェンス（セキュリティ・フェンス）」と表現しています。一方、イスラエル国内に住むパレスチナの人たちには、イスラエルの差別的な政策が、人びと（子どもたち）の間に「見えない壁」を作っているという不安があります。イスラエルによる非常に巧妙な差別的支配によって、パレスチナの人びとがさまざまな不正義に直面させられているということを、私たちは今回の訪問においてさらに深刻にうけとめました。
- (4) 今回の交流の中には含まれませんが、当地の他に近隣の中東諸国に離散して生活することを強いられているパレスチナ難民の人びとのことも、エルサレム教区の働きの中に覚えられなければなりません。この人びとは、さらに不安定な生活と家族の離散による苦難を負って生きています。

＜エルサレム教区の働きから見えてきたこと＞

エルサレム教区は、病院・学校など、パレスチナの人々にとって欠くことのできない重要な働きを、広範囲に行っています。その中のごく一部を見学した限りにおいて、印象深かったことは以下の点です。

- 各年齢層の青少年サマー・キャンプを通して、ユダヤ教、イスラム教、キリスト教の青少年が出会い、同じ人間としての信頼と和解を求めるために働いています。
- 幼稚園、保育園、学校、学生寮をとおして、子どもたちの教育環境を整え、学習意欲を与えるために努力しています。
- 今回の訪問で出会ったパレスチナのクリスチャンたち、また特に母親である女性たちは、自分の子どもたち、若い世代の人たちに、キリスト教の信仰とその精神を継承し続けてほしいとの、強い思いがあります。

＜今後の協働に向けて＞

- (1) エルサレム教区の青少年キャンプへの支援と参加
 - ・東京教区と日本聖公会他教区の青少年プログラムとの関係作り
 - ・日曜学校間の交流を通して
- (2) 対話を継続するために、数日にわたって一つの場所に集まって相互についての理解を深める会を開く。相互の理解を深める会の一つの可能性として、イスラエル領内で生活し、パレスチナ自治区で生活し、外国で難民として生活している、これら三つの異なった状況にあるパレスチナ・キリスト者と、日本のキリスト者が出会うこと。
- (3) 教育・生活向上・対話プログラム (Kids for Peace in Japan の実現!) への支援と参加

＜おわりに＞

8日間にわたる今回の交流を可能とし、実りあるものとさせて下さったエルサレム教区、東京教区のすべての努力に対して、私たちは心から感謝します。そして両教区の、主にある協働がこれからも強められ深められることを願います。

今日の世界で、すべての人間、子どもが、その生まれた土地、家族、文化の中で、互いを尊重して生きることは保障されなければなりません。それは神から与えられたもっとも大切な人間の交わりを回復することであると、私たちは信じます。これからもこの信仰を、パレスチナの兄弟姉妹と分かち合い、支え合うことができますように、またそのことが、日本のキリスト者としての一つの証しの行為となりますようにと祈るものです。

日本聖公会東京教区 主教 植田仁太郎

司祭 高橋 顕 (阿佐谷聖公会聖ペテロ教会)

司祭 宮崎 仁 (横浜教区柏聖アンデレ教会 伝道所)

司祭 山野 繁子 (東京諸聖徒教会)

執事 神崎 和子 (池袋聖公会)

植田 栄基 (牛込聖公会聖バルナバ教会)

打田 茉莉 (東京聖十字教会)

大森 明彦 (東京教区聖職候補生)

金子 郁子 (サラームパレスチナ)

佐々木 紀久江 (葛飾茨十字教会)

中村 とゑ子 (横浜教区清里聖アンデレ教会)

富士 晴英 (サラームパレスチナ)

吉松 さち子 (聖オルバン教会)